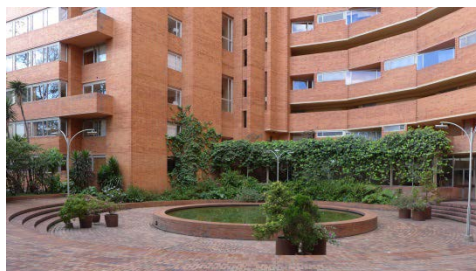




■パークタワー(Torre del Parque Residencial Complex)手前見えるのが「サンタマリア闘牛場」住戸の位置によっては闘牛を見ることができよう。

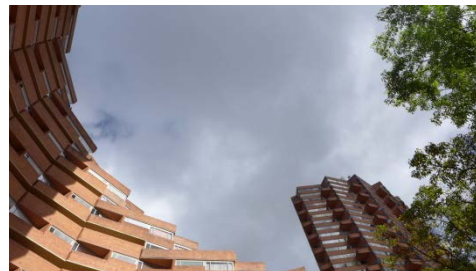


■闘牛場の東側に3棟のレンガの高層アパート群で構成され、1965～1970年に計画された。最高部で37階、117mの高さがある。東側の背後にモンセラテ教会のある丘があり、それに呼応するように建物が構成されている。Googleで航空写真を見ると、大規模な都市の連続した公共緑地をつくろうとした意図が見て取れる。(写真はgoogle mapから)



■曲線に囲まれた、建物のパティオ部分、公共緑地として市民が溜まり、通り抜ける配慮がなされている。周辺は緑に囲まれ、レンガとの調和に、彼の並々ならぬ、こだわりが読み取れる。ディテールなど今日のボゴタの街並みを構成している造形への、彼の影響は計り知れないものがある。サルモナは実際に、このアパートに住んでいたという。

■3棟の建物は、異なる高さや形態を持つが、手前のサンタマリア闘牛場のボリューム、背景になっているモンセラテの丘のシルエットに呼応するように構成されている。建設敷地の70%を庭園、広場などの公共空間にあって、南側のプラネタリアム、独立公園(Parque de la Independencia)と連続させることにより、都市の中に大規模な公園緑地をつくり出している。



■3600m級の尾根の縦走。私は最後尾を、はるか彼方の先頭集団を見ないように、同僚に動かされながら、プロモーターと歩いている。



■フライレホンの群生、この急な斜面を10歩、歩いては息を整えて進む有様で、登って自力で下山できるが、時々不安もよぎる、雨の中の行軍。



■成長したフライレホン、疲労のあまり思わず手を掛けて1本折れそうに。これまで、見たこともない驚嘆すべき光景が広がっていた。

今年のプリッカー賞は、チリの建築家、アレハンドロ・アラヴァエナが受賞した。ここコロンビアでも、2013年にメジン(Medellin)がニューヨークを押さえて、世界で最も革新的な都市に与えられる Innovative City of the Year 受賞している。南米が世界をリードし、建築や都市計画においてコロンビアは決して後進国ではない。コロンビアでは建築家のことをアルキテクト(Arquitecto: 男性)、またはアルキテクタ(Arquitecta: 女性)というが、ここでは最もホビュラーな職業のようだ。私のアパートの大家の祖父、そして不動産屋の息子、家内がボランティアに通う日本語学校の責任者までも Arquitecto だそうで、私の配属先の都市計画部門には10人のスタッフがいるが、そのうち4人が Arquitecto で2人が Arquitecta を名乗っている。そういうわけで私は、ここではバイサヒスタ(Paisajista: 造園家)と市の広報では紹介されている。

コロンビアで最もよく知られた建築家は、ロヘリオ・サルモ

ナ(Rogelio Salmons: 1927～2007)だが、彼の設計した集合住宅が、ボランティア仲間の配属先近くにあるというので行ってみた。サルモナは、1950年代にル・コルビュジェのもとで10年間働き、その後コロンビアに戻り、伝統に根ざした建築を発表し続けたことで有名で、ボゴタ市の都市計画は彼の影響が大きい。日本でも作品集が出版されたことがある。紹介する「パークタワー」は1970年代に、計画されたものだが、足元の闘牛場、背景の丘陵と調和した優れた都市景観を作り出している。曲線を多用する建築家で知られているがここでも曲線が、高層住宅群にうおいを与え、レンガの多用が温かい空間を生み出している。円形の中庭は緑に囲まれ、とても中心市街地にあるとは思えない静寂さを保ち建設されてから50年を経たとは思えない新鮮さがある。いくつかの住戸に Ariendo(眞實)の張り紙が見られ、じっと見つめる私を、この地区は JICA の居住範囲外だからと、家内は見透した言い方をしたが、そんな危険なところとはとても思えない、周辺の発展ぶりである。

市の東側に山が連なり、これが市のランドマークになっていることは前にも伝えたが、その山を越え1時間ほど車で走るとチンガサ国立公園があり、ここにボゴタの80%の水を供給している水源があるという。この3600mの高地にはシカ、メガマ、バクなどの動物が生息し、フライレホンなどの珍しい植物で独特の景観を持つことはよく同僚に聞いていた。4月27日には69歳の誕生日を配属先で盛大に祝ってもらったが、誕生日にハイキングに招待するという誘い乗ってしまい、雨の中、このチンガサの尾根、温泉を6時間わたって行軍するという洗いをうけた。無事自力で下山できたからいいものを、ウォーキングシューズにトレーニングウェアというハイキングスタイルで気軽に登れるようなコースではなく、途中3度

ほど、酸素不足と足の痙攣で気を失いそうになった。急な斜面を10歩ほど歩いては、息を整えて進む有様で、コロンビア人の心肺機能の高さにただただ驚くばかりであった。家内は、1時間のウォーキングで早々に、リタイア勧告を受け、難を免れたが、折角の誘いに私は途中棄権も悪いと思い、歳も顧みず無理をした。景色どころではなかった。周辺の景観は確かに苦労して登るだけの価値あるもので、フライレホンやその他の植物で生み出される異様な風景に目を奪われた。生憎の雨で、遠くまでの景色は望めなかったが、霧に煙る山並み、温泉もいいもので、日本では得られない感動の瞬間もあった。帰ってから、これが歩いた距離だと、グーグルマップを同僚に示してくれたが、事前を知っていれば、キツキツ断った経路であった。